city&life

都市のしくみとくらし

別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

第30回（2019年度）緑の環境プラン大賞受賞作品集

city&life 別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

表紙――エリア3プロジェクト～みんなで育み集う場所～（関連記事:p12）
裏表紙――江戸ルネサンス 伝統と文化が薫るおもてなし（関連記事:p18）
photo:坂本政十賜

ウィズ・コロナ／アフター・コロナ社会は多様な環境プランで

審査委員会委員長 進士五十八

「緑の環境プラン大賞」も、すでに30回を超えた。

かつては都市の緑というと、公園や屋上・壁面緑化を連想したものだ。

計画とか機能とかを武器とする専門家ほど空間質や美観を重視したものだが、福祉、コミュニティ、学校関係者など幅広のNPOや一般市民の応募による「緑の環境プラン」ともなると、そのアイデア、イメージやデザイン、さらにはプロジェクトのすすめ方や参加の形も、実に多彩で多様になってきた。

私はこの事業が、第一生命と同財団の支援と参画によって継続されていることに深謝しているが、それと共に「シンボル・ガーデン部門」「ポケット・ガーデン部門」ともに傑作続出で、改めて“市民目線の身近な環境革命の全国的展開”が、ニューグリーン・エコライフの先駆けとなっている感を強くしている。

たとえば東京藝術大学の先生方が、大学周辺の街路を誰もが歩いて楽しい四季折々表情豊かな花木の「みちひろば」へと仕上げられた。景観法にもとづく「渋谷・青山景観整備機構」の皆さんが、青山通りを美しい緑の街路景観に変身させ、そのメンテナンスも地元住民や企業社員とコラボして盛り上げた。NPO法人こどもコミュニティケアの皆さんは「みのりの森と回廊」を地域協働で創出、地域共生社会を具現化しようとしている。

テーマや場所も、観光客・キャンパーとの交流、介護・デイサービス、マルシェ、オープンカフェ……等々。

正に何でもありである。「みんなちがって・みんないい」のが、ウィズ・コロナ／アフター・コロナ時代の「緑の環境プラン」というものであろう。

しんじ・いそや――福井県立大学長／東京農業大学名誉教授・元学長／農学博士（環境学・造園学）

contents

シンボル・ガーデン部門

国土交通大臣賞

東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室
東京藝術大学上野キャンパス 上野と谷根千を結ぶ「みちひろば」
東京都台東区 4

緑化大賞

特定非営利活動法人渋谷・青山景観整備機構（SALF）
青山通り 緑のおもてなし風景街道
東京都渋谷区・港区 6

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞

特定非営利活動法人“矢中の杜”の守り人
地域の文化遺産の庭園を活用した交流と体験の広場
茨城県つくば市 8

コミュニティ大賞

社会福祉法人ぶるーむ
かしわ・みんなの杜
千葉県柏市 10

NPO法人 森の会
海辺の森 花咲く小路プロジェクト
新潟県新潟市 11

川崎絆づくり
エリア3プロジェクト ～みんなで育み集う場所～
静岡県牧之原市 12

重利の山を守る会
花と緑で繋がるテラス「重利の里山公園」
京都府亀岡市 13

大正通り商店街サポーターズ
食と植のまちにわ
大阪府柏原市 14

姫路市立白鷺小中学校
世界文化遺産姫路城 中曲輪バタフライガーデン創造事業
～400年前（姫路城築城時）の蝶の飛び交う風景の再現～
兵庫県姫路市 15

古小烏公園愛護会
花と緑で人とまちをつなぐ、保育園とつくる公園
福岡県福岡市 16

社会福祉法人愛の泉保育園
身近な自然に触れ道行く人と鳥や虫が憩う花と緑の広場
沖縄県沖縄市 17

特別企画「おもてなしの庭」

大賞

台東区
江戸ルネサンス 伝統と文化が薫るおもてなし
東京都台東区 18

※一般社団法人日本造園組合連合会、特定非営利活動法人こどもコミュニティケアおよび江南の藤保存会については次回掲載予定

国土交通大臣賞

東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室
東京藝術大学上野キャンパス 上野と谷根千を結ぶ「みちひろば」

東京都台東区

●東京藝術大学正門から東京最古の赤レンガ建築を望む

武蔵野由来の在来種を混植し生垣にする

上野公園エリアと谷中・根津・千駄木エリア（いわゆる谷根千）をつなぐメインストリートが東京藝術大学（以後藝大と略記）キャンパスを貫通している。この道を、誰もが歩いて楽しい空間につくりかえようというのが「みちひろば」だ。

対象地は、20年前に藝大の大学美術館が建設された際に公開空地的に整備された場所。しかし、経年変化で客土が流出し、踏み固められた状態が長く続いていた。また、キャンパスと公道の境界には鉄柵が設けられていて、往来者には、閉鎖的な印象を与える景観となっていた。

鉄柵を撤去し、かわりに植栽を配して、緑の空間に再生させた。その際、鉄柵と同様に景観を損ねていた中低木を伐採し、新たに見通しの良い低木植栽帯を設置した。「藝大ヘッジ」と名付けられたこの試みは、武蔵野由来の在来種――落葉・常緑、広葉・針葉の樹種30種を混植し生垣にするもの。手前から奥行き方向に竹を組み、そこに横方向に30種で一組にした苗木を千鳥配置にした。2016年にスタートし新たに植樹された本数は6400本あまりを数える。

「みちひろば」が、将来的には歩行者優先の空間へと生まれ変われることを想定しているという。芸術文化の集積地上野公園と、庶民文化の香りの残る谷根千を結ぶ「みちひろば」。それは、藝大を含めた新たな公園キャンパスの誕生を意味するだろう。

●排水マスの上部に置かれた照明内蔵のスツールベンチ。左右に見えるのは土留用の蛇籠

●蛇籠じたいにツタが巻きつき、いずれツタに覆われる

●横方向に落葉、常緑を交互に植える。奥行き方向は30cm間隔で千鳥に配列

●ナンキンハゼの並木の足元に設置されたスツールベンチで一休み

●大学美術館前の対象地。既存高木のナンキンハゼが並木を形成する

特定非営利活動法人 渋谷・青山景観整備機構（SALF）
青山通り 緑のおもてなし風景街道

東京都渋谷区・港区

●助成金を使って青山通りの3箇所で緑化を行っている。渋谷区宮益坂上交差点・交通島もそのひとつ

四季を通して美しいローメンテナンスな植栽

青山通りは、国土交通省の日本風景街道「東京・迎賓地区」の中核道路として東京都が指定している「景観重要道路」の一つだ。特定非営利活動法人渋谷・青山景観整備機構は、青山通りの街路の植え込みを中心に、宿根草やグラス類を組み合わせた植栽を施すことで、世界に誇れる美しい街路空間にすることを目指した。

四季の変化が感じられる魅力的な緑化景観の創出を目標にしつつ、日々のメンテナンスに地元住民や近隣企業の社員ボランティアが参加することで、地域のコミュニティづくりにも貢献しようというのだ。

街路の補修にかかわる補助が減少するなか気候変動も激しく、街路緑化の新たな知恵が求められている。いかにローメンテナンスで厳しい気候にも耐え、年間を通して美しいグリーンが維持できるか。こうした課題に対してオランダ生まれの植栽手法ナチュラリスティックガーデンが注目されている。別名ダッチウェーブ（Duch Wave）と呼ばれる植栽法で、従来の「植え替え」「花柄摘み」「施肥」「病害虫防除」などの作業を限りなく軽減しつつ、四季を通して美しさを感じることができる手法だ。

植えられた植物は宿根草を中心に、丈夫で四季の移り変わりを感じさせる、生物多様性にも寄与する品種が選ばれた。可能な限りこの土地にあった植生をデザインすること。街路緑化の「新しい形」の真価が問われるのはこれからだ。

●宿根草やグラス類を中心に、四季の移り変わりを感じられるようなナチュラルな植栽を施した

●信号待ちで多くの人が足を止める交通島は、青山通りを見通せるビューポイントでもある

●青山2丁目交差点、明治神宮外苑銀杏並木前の植え込み。季節の宿根草が風にそよぎ、ふと懐かしさを感じるような一角

●青山小学校前歩道橋の小さな花壇。クリスマスローズ、アリウム、ツワブキなどが植えられ、季節の華やかさを演出する

国土交通大臣賞

特定非営利活動法人“矢中の杜”の守り人
地域の文化遺産の庭園を活用した交流と体験の広場

茨城県つくば市

●敷地裏の道に面して数種類のツツジを植栽。春には、道沿いに続くサクラ並木も借景に

●竜巻被害により倒壊した大谷石の塀は、土留を兼ねて横詰みに。敷地内外の見通しがよくなった

●邸宅の北に広がる「奥庭」

緑陰が心地よい、地域交流の拠点

2011年、国の登録文化財に指定された「矢中の杜」。当地出身の実業家であり、建材研究家でもあった矢中龍次郎が1938年から1953年にかけ、自邸および迎賓のために建てた近代和風建築と、その周囲に広がる庭園からなる。敷地面積はおよそ770坪に及ぶ。

邸宅は居住棟と迎賓棟の二棟。当時の技術と知識が注ぎ込まれた邸宅は、建具・調度すべてに贅が尽くされ豪華だが、それ以上に、自然循環による徹底した換気機能が施されていることが特徴だ。施主が亡くなってから約40年間、空き家になっていた邸宅を、この換気機能が静かに守り続けていた。

ただ、空き家だった間に、見事だった庭園は、鬱蒼とした森になっていた。とくに「奥庭」と呼ばれるエリアでは、2012年の竜巻被害もあり、大谷石の塀が崩れて荒れた状態に。それが今回の助成を機に、緑豊かな広場に生まれ変わった。管理・運営を担う特定非営利活動法人「“矢中の杜”の守り人」のメンバーにより、老朽化していた作業小屋は解体され、雑草もすっかり刈り取られた。倒壊した石塀は土留を兼ねて低く横詰みされ、外からも庭が眺められる、地域に開かれた空間が誕生した。

新たに植栽したのは、数種類のツツジやグランドカバーとしてシバザクラなど。今後は子どもたちの自然観察教室や各種ワークショップなどを開催し、地域の交流拠点として、大いに活用していく予定だ。

●既存樹木のサルスベリはシンボルツリーとして残した

●邸宅は、木造平屋の居住棟と2階建（1階はRC造、2階は木造）の迎賓棟からなり、渡り廊下でつながっている

●整備前は、鬱蒼と草木が生い茂り、荒れ放題だったそう

●この日も、メンバーが集まり、庭の手入れを行っていた

●落ち葉を集めて堆肥に。その隣には菜園をつくり、今後、食育につながる活動も展開していく予定

社会福祉法人ぶるーむ
かしわ・みんなの杜
千葉県柏市

●樹木の根に配慮しながら、蛇行した散策路が整備された「みんなの杜」

●歩道からもスムーズに森に入ることができ、地域の人々の日常的な散歩コースにもなっている

●歩道の拡張工事により伐採されていた林縁植生を回復させた

●楽しく散策できる工夫として、一本橋や渡り石、スツールも整備されている

地域に開かれた豊かな森へ

住宅街の一角に、樹高およそ20mにも及ぶイヌシデを中心とした雑木林が広がっている。その奥に建つ「ぶるーむの風」は、障がい児とその家族のサポートを行う「社会福祉法人ぶるーむ」が運営する診療所をもつ複合施設で2019年に開所した。大きな窓ガラス越しに雑木林を望むコミュニティ・カフェには、木漏れ日が心地よく降り注いでいる。理事長の野田幸子さんは「施設の新設にあたりできる限り樹木を残したいと考えました」と語る。一帯にはかつて同様の雑木林が広がっていたが、残っていたのはこの場所だけ。そこで地域の緑の拠点として、開かれた森づくりを計画。ランドスケープアーキテクトの大野暁彦さんと共に「かしわ・みんなの杜」プロジェクトがスタートした。

大野さんがまず取り組んだのは、脆弱になっていた林床と林縁の回復だ。施設建設予定地の林床植生を隣接地に移植して養生、同時に、既存林や近隣から採取した在来種の種を育て、これらを林の中に戻した。これにより、ヤブコウジやスイカズラ、ムラサキシキブなどの小低木類が充実。高木が中心で、木々を身近に感じられなかった森の中に多彩な植生が復活した。

「これからは多年草を増やしたい」と大野さん。日常的な森の管理は施設で行うが、森の植生が安定するまでは大野さんも継続的に携わり、環境を整えていくという。都市に潤いを与える「みんなの杜」は、今後ますますその存在感を増していくはずだ。

NPO法人 森の会
海辺の森 花咲く小路プロジェクト
新潟県新潟市

●ニセアカシアの間伐材を縁木に、遊歩道沿いに整備された花壇

●海辺のキャンプ場を彩るヒマワリ

●当地ではコキア栽培も盛んなため、ヒマワリの足元には、立派な株が植栽されている

●ニセアカシアを伐採した跡地ではクロマツの幼苗が育てられている

●ヒマワリの後に植栽予定の黄花コスモスが種から育てられていた

海辺のキャンプ場を彩る四季の花々

「アカシア」というと、白い房状の花をつける高木がよく知られる。有名なのは札幌のアカシア並木だが、明治初期、街路樹や海岸林として各地に導入されたこの木は北米原産の外来種で、正式名は「ニセアカシア」。繁殖力が強く、在来種の生態系や治水にも影響があるとして、近年、駆除・管理が必要な樹種となっている。

新潟市、鳥見浜海水浴場に隣接する「海辺の森キャンプ場」一帯でも、ニセアカシアの繁茂により荒廃した林相が生じていた。キャンプ場の管理・運営を担う「NPO法人 森の会」では、ニセアカシアの伐採と共に、在来のクロマツ苗を育てるなど、一帯の自然環境を適性にする活動を展開してきた。そしてこの度、伐採木をキャンプ場内遊歩道沿いの花壇用縁木として再利用する「花咲く小路プロジェクト」がスタートした。

「キャンプ場一帯はほとんど花のない雑木林でした。そこで新たに花壇を整備し、春はチューリップ、夏はヒマワリ、秋はコスモスと季節の花々を植え、訪れる人をお迎えします。植栽には、地域の市民グループや小・中学校の子どもたちにも参加してもらいました」。そう教えてくれるのは、同法人で技術顧問を務める落合誠さんだ。8月末のこの日は、ヒマワリの花が明るく咲き誇っていた。開花後には種を採取し、翌年のために育てていく。これも地域の人々に協力してもらう予定だ。環境保全と資源の再利用のためのアイデアが、地域に豊かな彩りを与えている。

川崎絆づくり
エリア3プロジェクト～みんなで育み集う場所～

静岡県牧之原市

●子どもたちや近隣の人々が摘んでも良い（良識ある範囲で）という大らかさ。「また育てて植えます」と大石さん

●児童館に訪れる子どもたちにも大人気の広場として再生された

●中央の多肉植物が「セネシオ・マンドラリスカエ」

●蛇行する園路に沿って個性的な草花が植えられた花壇

緑あふれる地域の庭

ローダンセマム、グレビレア、セネシオ・マンドラリスカエ、ロニセラ・ニティダ……。児童館前の芝生広場を囲む花壇に植えられた植物の一例だ。「浜名湖ガーデンパークガーデンを管理するGreen Pure Heart葉音（ハノン）に協力してもらい、潮風にも強く丈夫で、地域の庭や公園ではちょっと見られない草花を植えました」。そう教えてくれるのは牧之原市役所の職員であり、この地域の住民でもある大石泰代さんだ。この他、活動に賛同する企業から提供を受けたたくさんのペチュニアが、パラソルのような花をパッと開いている。

ここにはかつて資料館が建っていた。その建物が取り壊された後およそ10年間は、雑草が茂り、石が転がるばかりの空き地だった。2016年、地域活性化を目指し、地域住民を中心とする団体「川崎絆づくり」が発足。自治会や児童館の利用者、行政も一緒になり、この場所をどのように活用できるか、ワークショップを繰り返した。手探り状態の中、広場の石拾いをスタートすると、その姿を見た地域の人々も活動に参加、まさにこの場所から、新しい「絆」が育まれていった。「今後は種から苗を育て、花壇の更新や充実を行っていく予定です」と大石さん。野菜畑やハーブ園もつくり、児童館を利用する子どもたちと料理をするなど、食育につながる活動も展開していきたいと考えている。

訪れる人々が自由に振る舞える、緑に包まれた暖かな空間が誕生した。

重利（しげとし）の山を守る会
花と緑で繋がるテラス「重利の里山公園」

京都府亀岡市

●石窯をもつピザ小屋には発電機なども用意され、防災拠点としても機能している

●斜面上にはピザ小屋があり、テラスと連携して使われていく予定

●重利の山の入り口に、新たに設けられたテラス

●会のメンバーによって整備された遊歩道

●上まで登れば展望が開けるツリーハウス

里山を楽しむコミュニティ・テラス

亀岡市を流れる曽我谷川の右岸、スギ、ヒノキの育成林であった通称・重利（しげとし）の山。およそ50年前、その裾野に住宅地が拓かれた。この間、育成林であった山はその機能を失い、手入れが行き届かず、住宅地への倒木や落石の恐れを孕むようになった。そこで2015年、住民らにより「重利の山を守る会」が発足。山林地権者と合意のうえ、間伐や下草刈りなどの整備を行ってきた。それでも2019年の台風の際、倒木が民家に倒れかかる被害があった。会の代表を務める長瀬清澄さんは「私たちの活動を一層充実させ、安全に楽しめる山にするためにも、地域の方々により関心を持ってもらうことが大切。そこで今回の助成を活用し、コミュニティ・テラスをつくりました」と教えてくれる。

会ではこれまでにも、間伐材を利用した「親と子の木工教室」やアーティストを招いての「森のコンサート」などを開催してきた。また自分たちで耐火煉瓦を積んだピザ窯を有するピザハウスも建て、各種イベントの際には、参加者にピザを振舞うなど、山を楽しむ機会をつくってきた。そして今回の助成では、ピザハウスと連動させる形でウッドデッキのテラスを新設。中央にはシンボルツリーとして枝垂れ桜を植栽した。今後はこの場所で、従来イベントの拡大版を開催する他、地域で人気の天然酵母パン屋さんの協力を得て、オープンカフェも開催される予定だ。新たな場の誕生は、地域の交流の輪をさらに広げていくに違いない。

大正通り商店街サポーターズ
食と植のまちにわ
大阪府柏原市

●商店街沿いの空き家を減築して広場を形成。道路沿いにはミニトマトの水耕栽培が設置された

●近隣の子どもたちと収穫祭を行う予定

●水耕栽培により、中空で育つミニトマト

●2018年にオープンした、空き家をリノベーションしたパン屋さんや食堂が集まる街区「大正通りポケット」

●大正通りポケット内のコインパーキングはレンタルスペースになっており、移動販売や展示が可能。この日は朝採りの新鮮野菜を販売中

商店街を元気にする「食菜」の庭

JR柏原駅西口から、直線的に続く大正通り商店街。その歴史は古く、昭和30、40年代には、多くの商店に、デパートや映画館も存在し、いつも多くの人で賑わっていた。だが次第に空き店舗が増加、近年はシャッター街となっていた。

こうした状況の改善を目指し、2019年、地権者、商店主、住民らによる「大正通り商店街サポーターズ」が発足。商店街から柏原小学校へと向かう角地にあった空き家を減築、一部をコワーキングスペースや店舗として再生させ、商店街沿いには広場を形成した。この広場で、子どもたちを中心に地域の人々と共に、ミニトマトやブルーベリー、ソラマメといった野菜・果実を育て、加工し、食べる「食と植のまちにわ」づくりに取り組んでいる。土地のオーナーであり、サポーターズメンバーでもある柏元真理子さんは「この2、3年で、空き店舗をリノベーションしたパン屋さんやカフェなどがオープンした他、月に1度はマルシェも開催され、商店街を訪れる人が増えました。そんな人々が集い、大人も子どもも自由に振る舞える、街に愛される広場をつくりたいと考えています」と語る。

今回の助成を活用し、植栽を充実させていく予定だが、コロナ禍の影響で敷地整備が遅れてしまった。それでも、広場外周に水耕栽培のシステムを設置、ミニトマトを育て始めた。たくさんの実をつけたミニトマトが、今後のまちづくりを応援してくれているようだ。

ポケット・ガーデン部門
コミュニティ大賞

姫路市立白鷺小中学校
世界文化遺産姫路城 中曲輪バタフライガーデン創造事業 ～400年前（姫路城築城時）の蝶の飛び交う風景の再現～
兵庫県姫路市

●ジャコウアゲハは、葉の裏側に卵を産むのが特徴

●ウマノスズクサで見つけた脱皮した抜け皮

●子どもたちは一人一鉢苗を植えて育てている

●白鷺小中学校のフェンスには、カラフルなバタフライガーデンの看板。遠くに見えるのは姫路城

●学校の敷地内には、ジャコウアゲハの幼虫の好物ウマノスズクサや成虫が蜜を吸うブッドレアが植えられている

ジャコウアゲハが舞う街に

姫路城の眼前に400年前のジャコウアゲハの飛び交っていた風景を再現したい、そんな目的で2018年世界文化遺産姫路城 中曲輪バタフライガーデン創造事業は始まった。

白鷺小中学校は、姫路城の眼の前、特別史跡内の中曲輪に位置する。総合的な学習の時間を活用しSDGsの観点からも、持続可能な環境保全等について地域と協働できないかと考えていた。ジャコウアゲハは、市蝶であり、姫路城との歴史的なかかわりも深い。地域はもとより、姫路市とも協力して、今後は年間200万人が訪れる観光客を対象に、眼の前で蝶の生態観察ができる新たな観光スポットとして地域活性化につなげていければと考えている。

白鷺小中学校は、2018年に義務教育学校になったことで9年間を見通した教育活動が可能となった。また同時にコミュニティ・スクールとなったことで地域との連携も一層深まりつつある。多様な蝶の食草、蜜源植物の植栽を児童・生徒、周辺地域、関係機関などと協働して行っている。

ジャコウアゲハの食草であるウマノスズクサは、近年の開発で減少。それと連動してジャコウアゲハの個体数も減少してきた。ウマノスズクサの栽培・育成を子どもたちと一緒に行うことで、ジャコウアゲハが増える。その結果、姫路城周辺の自然環境が豊かになる。環境教育の目指すべき姿がここにはある。

古小烏（ふるこがらす）公園愛護会
花と緑で人とまちをつなぐ、保育園とつくる公園

福岡県福岡市

●月1回の草刈りは、住民参加で行われている

●市民が気軽に立ち寄れるように、公園入口には花やハーブが植えられた

●パーゴラ下のコンクリートを剝がして、芝生を敷きつめた

●奥の建物の1階がいふくまち保育園。室内からいつでも公園の様子が伺える

日常の一部になった公園づくり

古小烏（ふるこがらす）公園が誕生したのは1977年。2018年から、隣の「いふくまち保育園」が管理している。古小烏公園愛護会は、いふくまち保育園のメンバーを中心に、公園を花と緑でもっと豊かな環境にしようと活動を開始する。

当該公園が立地する伊福町は、福岡市のなかでも有数の高級住宅街。徒歩10分圏内に公園が6箇所あるが、緑に関していえば、満足のいくものは少なかった。そこで公園に対する関心をもっと高めたいとの思いから、住民と行政が一緒になって公園を再生することから始めた。具体的には、助成を利用して、公園を芝生化し、みんなで植物を育てる花壇をつくることにしたのだ。

地面のコンクリート部分を剝がし、芝生を張り、もとから植えられていた木々は残しながら、それを取り囲むように花やハーブを植えた。また、食育を意識して、畑をつくり、果樹も植えられた。

愛護会が住民と行政をつなぎ、公園の管理・運営に積極的にかかわっていく。愛護会の活動を公園に隣接する保育園が担っていることの意味は大きい。休日を除く毎日、公園を見守り、管理ができるからだ。何か問題が起きてもすぐに対応ができ、利用者と常にコミュニケーションがとれる。また気づきをすぐに実行できるのもメリットだという。公園づくりがここでは日常の一部になっている。

社会福祉法人愛の泉保育園
身近な自然に触れ道行く人と鳥や虫が憩う花と緑の広場

沖縄県沖縄市

●樹木の種類が一目でわかる大きな名札

●ホルトノキに、去年はセミがたくさん集まった

●ヒノキ製の台形テーブル、丸太椅子、丸太ベンチ。いずれも助成を利用して設置された

●トウワタの蜜を吸いにきたカバマダラ

●柔らかいトゲを持つフウセントウワタの実。周囲を飛び回るカバマダラ

緑が子どもたちや道行く人々の笑顔を誘う

保育園内外を季節の草花で彩り、自然に親しみながら季節の魅力や変化が楽しめる、そんな園庭をつくりたい。社会福祉法人愛の泉保育園は、「花を通して優しい心を育てる」という理念をもとに本格的な園庭整備に乗り出した。

保育園に隣接した民有地が売りに出されたことをきっかけに、保育園の園庭として購入。ただ、それから数年が経過。敷地に張られた芝生も一部が薄くなり、劣化が目立つようになった。園庭の大部分を占める芝生は、子どもたちが走り回るには適しているものの、季節の変化に乏しく、子どもたちの感性を豊かにするための新たな整備が必要になってきた。

そこで、園庭を緑化し、地域の景観に寄与すると共に、思い切って地域に開くことを提案。子どもたちの遊び場であり、地域の交流の場にもなる空間として、整備し直そうという目論見だ。

園庭を囲むフェンスにそって花壇がつくられた。その際、沖縄県産の草花を中心に、アゲハチョウの食草となるヒラミレモンや、カバマダラの食草のトウワタ、また沖縄県の蝶であるオオゴマダラの食草とされるホウライカガミなどが選ばれた。また、ゴーヤなどの県野菜を中心に子どもたち自身で栽培から収穫まで行える畑もつくられた。子どもと大人が一緒になって楽しめる場所。そこはいつしかたくさんの蝶がひらひらと舞ってやさしい庭園になっていた。

※第29回（2018年）にて本賞を受賞

台東区
江戸ルネサンス 伝統と文化が薫るおもてなし
東京都台東区

●雷門正面の駐車場入り口に設置された大小の朝顔のオブジェ

日本の伝統文化をアサガオと竹で表現

大提灯が目を引く雷門の正面に続く並木通り。その中央分離帯に草花を中心とした緑地がつくられた。全長167m、幅員約27mの並木通り、その中央分離帯の4カ所に、高さ3.5mと2.0mの大小合わせて8基のオブジェが並ぶ。

ステンレス製の支柱の表面に竹を編み込んだパネルが取り付けられて、アサガオやつる性植物がつるを巻き付けられるようになっている。取材当日（2020年7月中旬）は、つるをいっぱいに伸ばしたたくさんのアサガオが赤や青の花弁を広げていた。

江戸時代に発展した園芸文化である「朝顔」は、涼を呼び人々に潤いをもたらしてきた。そんな庶民の花として、台東区内では多く栽培されてきたという。また竹は、丈夫で独特のしなりがあり、古くから日用品、工芸品として、日本人には身近な素材だ。それぞれの特徴を活かした造形美を中心に、花を慈しむ心とおもてなしの心を表現したいと考え、アサガオと竹の組み合わせになったという。

アサガオの他にも4月の初めから6月終わりまで花をつけるスイカズラ、ムベなどのツタ類がオブジェに巻きつく。秋口から12月いっぱいまで花が咲くツワブキやキチジョウソウなどの下草類、やはり春から初夏にかけて開花するヤマブキやアジサイなどの低木類も植えられており、並木通りを利用する人々の目を楽しませてくれるはずだ。

●朝顔のオブジェの内部には棚が据えられており、鉢植えの状態でアサガオが置かれる

●ステンレス製の支柱に取りつけられた竹の編み込みにアサガオがみっしりと花を咲かせる

●今年のアサガオは、つるの巻き方もよく花弁も大きい

●子どもたちが育てた鉢植えが台東区公園課に寄贈された

●下草の選定は、愛好者にもよく知られたものが選ばれた

募集の対象

シンボル・ガーデン部門	全国を対象	緑のもつヒートアイランド緩和効果、生物多様性保全効果などを取り入れることにより、人と自然が共生する都市環境の形成及び地域コミュニティの活性化に寄与するアイデアを盛り込んだ地域のシンボル的な緑地プランを募集します。
ポケット・ガーデン部門	全国を対象	日常的な花や緑の活動を通して、地域コミュニティの活性化や保育園・幼稚園、学校、福祉施設などでの情操教育、身近な環境の改善に寄与するアイデアを盛り込んだプランを募集します。
特別企画 「おもてなしの庭」	東京都限定	2020年に向けた特別企画として、花と緑で観光客をお迎えする魅力ある緑の創出、及びその場所でのおもてなしの活動に関するアイデアを盛り込んだプランを東京都内限定で募集します。

表彰

シンボル・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞800万円以内（助成金）
	緑化大賞	2点程度	副賞800万円以内（助成金）
ポケット・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞100万円以内（助成金）
	コミュニティ大賞	9点程度	副賞100万円以内（助成金）
特別企画「おもてなしの庭」	大賞	1点	副賞2,020万円以内（助成金）

審査委員

委員長	進士 五十八	福井県立大学学長／東京農業大学名誉教授
委員	金子 忠一	東京農業大学教授
	北村 知久	国土交通省都市局長
	鈴木 裕一	株式会社産業経済新聞社上席執行役員
	永山 妙子	マネジメントコンサルタント
	藤沢 久美	シンクタンク・ソフィアバンク代表
	村上 暁信	筑波大学システム情報系教授
	稲垣 精二	第一生命保険株式会社代表取締役社長
	小野 文夫	一般財団法人第一生命財団常務理事
	髙梨 雅明	公益社団法人都市緑化機構専務理事

※役職は2019年審査会当時

スケジュール

募集期間	2019年4月1日～6月30日
審査会	2019年9月19日
入選発表	2019年10月17日
表彰式	2019年11月25日 於:明治記念館

主催等

主催	公益財団法人都市緑化機構、一般財団法人第一生命財団
後援	国土交通省、環境省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、東京都（おもてなしの庭）
特別協賛	第一生命保険株式会社
協力	一般社団法人建設広報協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般社団法人日本造園建設業協会、 都市緑化基金等連絡協議会 株式会社フジテレビジョン、株式会社産業経済新聞社、株式会社ニッポン放送

city&life 別冊

2021年4月1日発行

発行者　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社 アルシーヴ社
斎藤夕子

撮影　坂本政十賜

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社 エイチケイグラフィックス

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city@life 別冊